大学の授業とは

常識を破壊することで新しい問題が見えてくる

大久保 智生

KEYWORD

[授業が魅力ある先生]

2008年7月、学生組織MINtS（ミントス）が1年生を中心に500人以上へのアンケート調査を行った項目のひとつ。大久保先生は、このほかにも「毎週おしゃれだなぁ～と思う先生」「面白い!（授業or先生個人）と思う先生」「ダンディーor萌～♪（^ω^*）と思う先生」「父or母だったらいいなぁ☆と思う先生」の合計5項目で1位になった。

「少年犯罪が増えているって誰が言ったの？データで見ると減少してるよ。マスコミのいうことを鵜呑みにしちゃだめだろ」「血液型による傾向を信じている人が信じられない。きちんとしたデータには、血液型の傾向なんて存在しないよ」「そもそも心理学を勉強しても人の心の中なんてわかんないから」。

これは一般教養・心理学Dの講義の一場面。教壇に立つのは、学生とあまり変わらない服装をした、まだ32歳の大久保准教授です。大久保先生の授業では、しばしば学生の常識が覆されています。しかし、高校までにはなかったその刺激がウケて、昨年度『授業が魅力ある先生』の1位に選ばれました。「大学生のスタートラインというべき一般教養の時間なので、心理学の勉強もさることながら、まずは学生の常識を破壊することを狙っています」と先生。その理由は「高校までの勉強と、大学の勉強は本質的に違います。高校までは答えのある問題を解いてきたわけですが、大学で取り組むべきことは問題を自分で探すこと。これは社会人になってからも同じで、いずれは自分で問題から探すべき事柄にぶつかっていかなくてはいけませんよね。そのことを知ってもらうために、ある種の『答え』である常識を破壊し、自分で考えるということを意識してもらいたい」と考えているから。少々荒っぽいしゃべり方をしているのは、常識を見失った学生が今度は大久保先生を盲信してしまわないように、との配慮からです。「マスコミは信用できないが大久保先生の言うことは正しい、と思われたのでは結局同じこと。自分で考えないとね。だから人間性の"怪しさ"が出るように、わざと荒っぽくしゃべってますし、きちんとした服装をしているほど信じられやすいので、服装もスーツなどは着ません」。単位の出し方もシンプルで、評価はテストの点数のみ。授業態度や出席日数はまったく考慮しないという、見方によると非常に厳しい基準を明確にしています。これにも、努力が評価されるのは学生までで、社会では結果しか評価してくれないということを、少しでも体験してもらいたいという思いが込められています。

かなり振り切った授業をしている大久保先生ですが、『授業が魅力ある先生』1位に選ばれたことについては、「教えることのプロじゃないし、自分で上手いと思ったこともない。本業は研究者ですよ」と本人も驚いた様子。その本業の研究では、例えば学校の『荒れ』について、問題となっている生徒の心理を探るのではなく、その周りで静観している生徒の動向に目を向けることで新しい『荒れ』の構造を見つけ出すことに成功しています。問題を起こす生徒が周りの生徒のヒーローとなった時、『荒れ』が進むというものです。「問題になっている生徒の心に着目し続けてきて問題が解決してないんだから、見る角度を変える必要がありますよ」。このように、誰かの心の問題を掘り下げるだけでなく、視点を変えてそのまわりの社会に注目していくことも心理学。「視点を変えると問題の見え方も変わり、解決の仕方も変わる可能性がある。こういうことも授業を通じて伝えていきたいですね」。

PROFILE

おおくぼ　ともお
教育学部准教授
博士（人間科学）
専門分野：教育心理学
犯罪心理学

勉強を「やらす」のではなく「学びたい」に応える。
授業は先生と学生が一体となって進行していきます。

香川大学検定をつくる！

漢字検定、京都検定、四国観光検定など、いろいろな検定が流行っています。その中でもユニークな、大学をテーマにした『香川大学検定』という冊子が昨秋制作されました。実はこれ、元々は昨年度の教養ゼミナールの授業の成果をふまえて作成されたもの。講義名はその名も『香川大学検定をつくる！』です。授業で検定を作成するというのは、全国初の試みでした。この授業を担当しているのが葛城浩一准教授。「子どもの数の減少と共に受験の厳しさがかなり緩和され、入学しても大学に対する愛着が薄れつつあるのが現状です。その中で注目されているのが自校教育。香川大学の検定を作成するという作業の中で、大学に対する理解を深めてもらおうというのが狙いです」。もちろん検定という仕掛けのおもしろさがあるので、一般の香川大学生が冊子を読む可能性も高く、そこでも香川大学への理解が深まります。遊びのように見えて、実によく練られた取り組みなのです。

『香川大学検定をつくる！』が面白いのは内容だけではありません。その授業の進め方にも、葛城先生は変わったシステムを導入しています。授業は講義形式ではなく、6つのチームに分かれ、それぞれが実際に検定冊子を作成してその出来を競い合うという形で進められます。まず中間発表の時に暫定順位が決まり、1位～3位のチームが順次指名して4～6位のチームを吸収。以降は3チームが競合し、最終発表で1位～3位が確定します。驚くのは、授業の評価方法が公開されていること。学生はいつでも自分の状況が確認でき、それをモチベーションに変えられます。例えば中間発表で1位～3位に入ることができなくても、出来が良ければ、1位のチームに吸収される可能性があるわけで、それぞれの立場で常に目的を見つけながら授業に参加できるのです。「いかに学生のモチベーションを高めるかということも、今の大学教育の重要なテーマです。やる気というのは伝播するんですよ。やる気のあるチームに吸収されることで、下位チームのメンバーにもやる気が生まれるということは考慮しています」と葛城先生。ゲーム感覚も取り入れられた、やりごたえのある授業です。

授業で一旦完成する検定本ですが、授業が半期であること、受講学生が1年生であるため香川大学に対する知識が十分でないことから、この時点では一般に公開するレベルには達していないそうです。それを引き継ぐのが、キャリア・カフェを拠点にして学生による学生支援を行っているMINtS（ミントス）の学生。彼らがさらに全体的なブラッシュアップを図り、印刷・製本された冊子として完成させるのです。ミントスには香川大学生なら誰でも参加できるので、授業が終わった後に最後まで冊子制作に関わることも自由。「今年もこの授業の成果をふまえて、ミントスのメンバーを中心に『香川大学検定2010』の制作にとりかかっているところです。大学内の学生や教職員だけでなく、大学外の高校生や地域の方々にも手にとっていただき、香川大学に対する理解をより深めてほしいですね」という葛城先生。香川大学のことを知りたかったら、なにより香川大学検定に挑戦するのが一番ということになりそうです。

かわいいキャラクターが案内する楽しい本に仕上がりました。

KEYWORD

［教養ゼミナール］

1年次の学生が、特定のテーマに関して担当教員の指導のもとに少人数で研究学習するゼミナール形式の授業。大学での学び方やその楽しさを発見できる機会となっている。約60講座の中からひとつを選択。

香川大学をよく知ることこそ
学びの気持ちの源泉

葛城浩一

PROFILE

くずき　こういち
大学教育開発センター
准教授
専門分野：教育社会学
高等教育研究

どこまで通じるか学生の力

学生たちの創造力が活きる
環境を地域と共に

荒川 雅生

KEYWORD

［社会人基礎力育成グランプリ］

大学における授業や活動等の中で、今の社会に必要とされる力を学生がどれだけ身につけることができたかを競い合う。昨年度は、書類審査を通過した40校が予選を行い、うち9校が本戦に進出した。経済産業省主宰。

株式会社カナックは、"木質バイオマスボイラ"の燃料がしばしば詰まるという問題に悩まされていました。昨年、その問題が香川大学工学部の学生が考案した装置によって解決されました。企業と学生を結びつけたもの。これが新たな産学連携の可能性を秘めた「PBL(プロジェクト・ベースト・ラーニング)―課題設定解決型学習法―」という授業です。

今までも、学生と企業を結びつける授業として「インターンシップ」という形態がありました。これは、学生が企業の元に短期間所属し、仕事の現場を体験するというものです。学生にとっては貴重な経験となるインターンシップ制度ですが、どうしても企業側の負担が大きくなり、インターンシップ期間中に何か成果が生まれるということが少ないという現状がありました。PBLが画期的なのは、学生が企業に所属しないということです。まず3～4人で組まれた4年生と院生混合の学生チームが企業とじっくり打ち合わせを行い、解決の可能性がある課題を両者で見つけます。学生チームはその課題を学校に持ち帰り、学内での研究、実験などで解決方法を模索するのです。これにより企業の負担は軽くなり、学生はより実践的な活動を行うことができるようになりました。そしてPBLのもうひとつの特徴が、先生が学生にアドバイスしないこと。課題の解決方法はもちろん、トラブルが起きても可能な限り学生が自分たちで対処します。その過程で本当のチームワークが理解でき、また企業の実際の問題を自分たちで解決することで確かな自信が生まれるのです。

工学部にPBLを導入したのは荒川雅生准教授。米スタンフォード大学でPBLの現場を見てその有効性を確信し、まだ日本で導入している大学が少なかった6年前からスタートさせました。荒川先生によると「PBLで何より大切なのは企業の協力です。幸い、私たちのケースでは、香川経済同友会のバックアップを得ることが出来ました。香川大学がPBLに成功しているのは香川経済同友会のおかげです」。

PBLの現場は学生まかせになる荒川先生ですが、その準備には多くの労苦があります。学生のチームは、意味無く分けられているのではありません。3～4人というのはプロジェクトに対しすべての人に役割が生まれるギリギリの人数。事前の実習と性格判断テストによりすべての生徒の適性を見極め、全員に役割が生まれる組み合わせを荒川先生が模索します。「性格判断テストはスタンフォード大学のPBLで使われているものと同じものです。テスト結果に不満がある生徒は再テストできるんですが、数値的にはほとんど変わりませんね」。テストを導入したのは昨年からですが、カナックのような成果が生まれ、経済産業省による"社会人基礎力育成グランプリ"においても、参加40校のうち本戦に残る9校に選ばれました。5年の歳月で成長してきた工学部のPBL。学生にとっても、企業にとっても、ひいては地域の活性化にも大きい可能性を感じさせる授業です。

PROFILE

あらかわ　まさお
工学部
信頼性情報システム工学科
准教授　博士（工学）
専門分野：設計工学
信頼性工学
感性工学

（株）カナックとのPBLで実際に採用された「木質バイオマスボイラの燃料多様化対策」の装置。

イニシアチブを取り、判断するのは学生。貴重な体験を積みます。